
前世の証明者

沖岳淒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

前世界の証明者

【Nコード】

N1911N

【作者名】

沖岳淒

【あらすじ】

何の変哲も無いはずの中学二年生の夏休み。

山に来ていた風谷龍哉、桐原由美、林崎信吾、高橋漣奈の四人は、古い神殿の魔法陣の力によって散り散りに見知らぬ地へと飛ばされてしまう。

そこは数秘術と呼ばれる魔法や、魔獣が当然のように存在する、日常からかけ離れた世界。

信吾と漣奈の行方を追うために、元の世界に帰るために、由美や仲間と共に旅を続けていく中で龍哉は世界の隠された秘密に気づき始

める。

第一章 途中。

（サブタイトルを付けてみました）

【1 - 1】 remain

「……信吾。一つ聞きたいんだけど、いい？」
「……………」

問いかけられた人物、はやしざきしんご林崎信吾は何も答えない。その額からは夏の暑さと、持っている物の重さの所為か、大量の汗が流れている。

「なんで僕たちがあの二人の荷物まで持ってたんの？」

問いかけた人物、かざたにりゅうや風谷龍哉は両手に持った二人分の荷物を見ながら親友に言った。

「……それは」
「おっそーい！ もっと速く歩け！！！」

信吾が口を開こうとした時、前方から叱責の声が響いた。

「「……はいはい」」

山道を二人分の荷物を持って登っていた為、龍哉も信吾も既に足が棒のようになっていたのだが、叱責を飛ばした人物はそれを完全に無視してくれた。

「ファイト！ もう少して終わりだから！」

今度は激励の声が聞こえた。顔を上げる余裕すらないため断定は出来ないが、おそらくさっきの声の主とは違う人物だ。

「ハア……頑張ろうか」
「……………」

中継地点である広場のような場所に、到着と同時に龍哉と信吾は倒れこんだ。

「お疲れ。……大変だったみたいだね」
「当たり前だ」
「……………」

桐原由美きじはらゆみが言った労いの言葉に対して、龍哉は即座に言葉を返した。

信吾は重症のようだ。言葉を発する気力さえ無いらしい。

「それに第一、どうして罰ゲームを僕まで受ける羽目になってんの？」

「しょうがないよ。男子ペアVS女子ペアだったんだから」

文句を言った龍哉に激励の声を出していたと思われる人物、高橋たかはし湊奈しれいなが諭すように言った。

「よし、そろそろ回復しただろうから、第二回、荷物持ちJKP大会ジャンケンボンしようか」

そう言っで、立ち上がった由美の足元には物言わぬ信吾の屍が転がっている。

「信吾は死んでるし、今度は僕が代表だ」
「却下。相手に代表者を決める権利があるってルールを忘れたの？」

「……信吾が恐ろしいくらい弱いのに、僕らに勝ち目があるとしても？」

十回先に先取した方が勝ち、のルールで行った一回戦は、見てていつそさすがしくなるほどだったのだ。

由美と湊奈はジャンケン最弱と名高い信吾を指名し、龍哉と信吾はとりあえず由美を指名した。

そして結果は、10 - 0で女子ペアの勝利に終わった。

「十連敗だよ！？ 最初は無駄な優しさでワザと負けてるのかと思っただけ、いくらなんでも弱すぎ！」

「次は奇跡が起こって、一回くらいは勝つかもしれないじゃないの」「一回勝つても、こっちの敗北には変わりないだろ！？」

「なんでジャンケンごときにそんなに必死になってるの？」

「荷物持ちの辛さを知らないからだ！」

「……男子が弱いのが悪いのよ」

「訂正願おうか。男子じゃない、信吾が弱いんだ。十連敗する確立は千二十四分の一だよ！？」

「……よく計算したわね」

「あのー二人とも？ そろそろ止めといったほうがいいと思うよ。ほら、林崎君が……」

「「え？ ……………あ…………」」

「……いいさいいさジャンケンが弱くたって生きていけるしそれにジャンケンってなにさ尖った石だったら紙なんて破れるし錆びたハサミじゃ厚紙は切れないだろむちゃくちゃだよ理不尽だこの世の悪だ存在価値なんかないんだ消えちゃえ消えちゃえ消えちゃえ」

先程まで由美の足元に転がっていた信吾は、いつの間にか隅のほうで地面にうずくまって『の』の字を書きながら。周りに黒いオーラが見えるのは龍哉たちの錯覚ではないかもしれない。

「これって」

「たぶん末期症状だ」

「……追い込んだのは風谷君と由美だけだね」

その後、性格が破綻しかけた（した？）信吾を元の状態に戻すのに、龍哉たちはかなりの時間を費やした。

「まず目的を確認しよう。桐原の家にあった古い地図に描かれている『惑いの湖』の発見。だよな？」

龍哉たちは何も山に遊びに来た訳ではない。今時には珍しい、班での自由研究の課題を終わらせるために真夏の太陽の下、山歩きをしているのだ。

『テーマ何にする？ 他の班のテーマと被りたくないし』

『……郷土史なんか調べても面白くないだろうな』

『そういえば昨日変な古い地図を蔵の整理中に見つけたんだけど』

『どんな地図？』

『なんか近くの山の地図で、『惑いの湖』って書いてあった』

『よし、決定。それを探しに行こう』

その時の班会議の様子である。

今思えば随分と短絡的だった。存在するかも分からない場所を探しに行くなど何故考えたのか分からない。

「で、地図に描かれている場所に行くには、ここから林を突っ切る必要がある」

龍哉が地図と方位磁針を見ながら指差した方向には、鬱蒼^{うつそう}とした杉林が広がっているだけで、少なくとも舗装された道が無いことは断言できそうだ。

「簡単に迷いそうだな。龍哉も俺も方向音痴だし」

「言わないで。考えないようにしてるんだから」

「いざって時には怜奈を頼ればいいし。大丈夫だって」

「え？ あたし？」

「だって湊奈以外のメンバーが全員方向音痴なんだもの」

「……」

三人分の冷たい視線が由美に向けられたが、由美は涼しげな表情でそれをかわした。

「なんだかんだ言ってもしょうがないし、そろそろ行こうよ」

「ウマイ！ 空気がウマイぞ！」

「オッサンくさいよ、信吾」

暗い林の中を歩くのは炎天下の登山よりもかなり楽だ。特に龍哉と信吾は荷物が一人分なので、かなり余裕がある。

「ハアハア……ゼエゼエ……フウフウ」

「大丈夫？ 由美」

そんな二人とは対照的に由美はグロッキー状態に陥っていた。

「というより、高橋は平気みたいだな。確か帰宅部だったはずだけ

ど……」

「あれ、知らないの？　うちは武術の名門なんだよ」

「もしかして駅前にある武家屋敷みたいな道場か？」

「うん。自慢じゃないけど、うちはかなり有名な槍術の流派なの」

見た目だけでは人のなりは分からない、という事だろうか。下手をすると龍哉と信吾よりも、漣奈は運動能力が高いのかもしれない。

「そんなことより、桐原が死に掛けてるぞ。休憩しよう」

「目的地までもう少しだし、頑張ろうよ」

龍哉の言葉どおり数分で歩くだけで、地図に描かれている場所と思わしき所に着くと、杉林の中に小さな広場のような空間があった。広場の中心には、人が腰掛けるくらいの大きさの岩が鎮座している。

「やっぱ無いか……」

「湖どころか水溜りさえないね」

「ま、昔はあったのかもしれないし、元からあるなんて期待はしてなかっただろ？」

一応期待していたらしい龍哉と漣奈、信じていなかったらしい信吾の三人がそれぞれの感想を口にした。

「あれ、由美は？」

「そつえば……」

「桐原ならそこにいるけど、どうかしたのか？」

由美はいつの間にか中心の岩の上に腰掛けている。それを見た龍哉は何故か違和感を感じ、岩を凝視した。

「ん？ どうし……………！！！」
「？ ……………！！！」

龍哉の変な様子に気づいた信吾と怜奈が龍哉の視線を追い、その異変を知った。

由美の座っている岩の下の方から黒く光り始めている。その光は徐々に岩の上の方へと上っていた。

「桐原！ その岩から離れる！」

「え？ って、うわ！」

龍哉が警告を発したことにより、ようやく由美は異変に気づき立ち上り、慌てて岩から離れた。

「……………っ！」

由美が立ち上がった瞬間、岩全体が黒い不気味な光に覆われ、その光が強さを増したのと同時に龍哉は階段を一段踏み外したような浮遊感に襲われた。

龍哉が目を開けると周りの風景は激変していた。目の前には学校の校庭よりも広い青い水を湛えた湖が広がっている。まるで鏡のようなその湖面は、光を反射して光り輝いていた。

それだけではない。反対側の岸には、巨大な灰色の建物がそびえたっている。

「な……………」

驚愕に目を見開いた信吾が隣で言葉を失っている。

「……………もしかしてこれが地図に描かれている『惑いの湖』なのか？」

「やたっ！　だつたら私たち凄い発見しちゃったんじゃない!？」

「……桐原。……僕たちは全然喜べるような状況に無いと思う」
「風谷君。それって元の場所に戻る方法のこと？」

漣奈はどうやら龍哉の言わんとする事が分かっているようだった。

「そう。あの変な岩の光でこの場所に来たのはいいけど、あの岩が見当たらないんだから、帰る方法も分からないってわけだろ？」

由美を初めとするメンバーの表情が龍哉の一言で蒼白になる。

「……ってことは、テレポートにせよ瞬間移動にせよ、それを使うことの出来る物を探さないといけないのか」

「それっぽいものなら、やっぱりアレよね……」

「あの変な建物のこと？」

「やっぱり……行ってみるしかないかな」

龍哉達は湖のほとりに沿って歩き出した。

どのように表現すればいいのかわからなくなるほど、その古い建物は遺跡と表現するにはあまりにも大きく、荘厳だった。
皆が沈黙する中、漣奈が言った。

「これ、遺跡って言うより神殿だね」

等間隔に並んだ石の柱と、独特な屋根の形を見ていると漣奈の表現が一番適切なような気がしてくる。

「龍哉、どうするんだ？　中に入ってみるのか？」

「その為に来たんだろ？　行ってみようよ」

「中にトラップとかあったらどうするんだよ。俺らはただの中学生だぜ？」

どうやら信吾は少々不安らしい。付き合いの長い龍哉から見ればかなり珍しいことだ。

「それは無いと思うよ。だって神殿って神を祀るための神聖な場所でしょ？ そんなところに危険な罠なんか仕掛けないよ」

この由美の意見には同意だと龍哉は思った。結局、「もし神を守る罠だったら……」とかなんとか言ってた信吾も含め、全員で神殿の中に入ることにした。

神殿の内部は窓からしか光が入らない為か、薄暗くなっている。

「……正直言つて、不気味だね」

「……これ作つた人趣味悪すぎだろ？」

信吾が悪趣味だと評した両側の壁に並んだ、剣を両手に乗せた銅像と槍を両手に乗せた銅像は確かに神殿の中の暗さとも相まって、不気味な雰囲気をかもしだしている。

床にも龍のような絵や、怪物のような形の生き物が描かれているのも異様な雰囲気をより一層深めていた。

「ここに祀られてるのって悪魔とか邪神じゃないの？」

「あながち否定できないのが怖い」

そこら辺で黒い服着た人たちが悪魔召還やってても違和感は無さそうだ。

「……ニンニクと十字架持ってくれば良かった。あと、聖水も……」
「それは対ドラキュラ用アイテムだろ。ってか聖水って何処で手に入れるつもり？」

「そういえば、駅前でオカルトアイテムとして、二千五百円で売られてたよ」

「……マジで？」

二千五百円の聖水。効果はあるのだろうか。他愛も無い話をして
いると、不意に由美が立ち止まった。

「……ねえ、アレって何だと思う？」

「アレって？」

「ほら、そこでなんか光ってるやつ」

漣奈が指差した神殿の奥の台座には、小さな赤い石が置いてあつた。

「危険臭プンプンだな」

「触った瞬間ドッカンとか？」

「呪いがかかっているのかもね」

「……もしかしたら、アレかもしれないよ」

「……は？」

龍哉の言葉に三人は「何が？」といった表情をした。

「だから、アレがさっきの岩と対になってるんじゃないかな」

「……可能性はあるよね」

「けど、誰が確かめに行くんだ？」

「……」

信吾の問いかけで皆が沈黙して「僕が行くよ」 いなかった。

「龍哉。いいのか？」

「だってどうせ誰が行かないといけない訳だし、桐原と高橋に行かせるわけにも行かないだろ？」

「……………」

「じゃ、そういうことで」

台座の方に向かって龍哉は走り出した。

「え、今の死亡フラグってやつじゃない？ 心配だから私も行ってくる！」

由美が遅れて駆け出すのを信吾と漣奈は呆然と見ていた。

龍哉は改めて置かれている石を見た。遠くから見ても分からなかったが、近くで見るとそのまるで血のような赤色がはっきりと確認できた。台座の色が黒であるためか、よりいっそう邪悪な物に見える。

「……………よしっ」

意を決した龍哉は一気に石を台座の上から掴み取った。

「……………」

「……………何も起こらないじゃん」

由美が龍哉の隣で言った。

「そりゃ爆発とか呪いとかが起こるよりはマシだけども。反応ナシつてのもなあ……」

「怪しかつただけだな、これ。やっぱり」

由美がそこまで言いかけたときだった。台座が大きな音を立てて崩れ去り、瓦礫の中から一つの影がゆらりと立ち上がった。

土煙がはれ、龍哉と由美はその奇怪な姿を目撃する事になった。

「嘘だろ……」

ライオンような頭、鋭く尖った爪。

そして緑の鱗に覆われた胴体。

その異形の怪物は、背中にはえる四枚の鳥の翼を羽ばたかせて宙に浮かんだ。

「風谷！」

呆然としていた龍哉は由美の声で我に返る。既に目の前には爪を振り上げる異形の姿があった。

周りの動きが遅くなる中、龍哉は必死で爪を避けようと思いつきり横に転がった。

「くっ！」

直撃は免れたようだが、当たりはしたようで龍哉の右肩に激痛が走った。切り裂かれた服からは血が滲み出している。

異形は振り抜いた爪を再び振り上げ、龍哉に向かって真っ直ぐに振り下ろしてきた。

立ち上がろうとするが、避けられそうに無い。死を覚悟し目を閉じたその時、衝撃の変わりに、鈍い金属音が響いた。

「つつ！……ほら、早く立って！」

長い黒髪を振り乱した漣奈が、銅像が持っていた槍で振り下ろされた異形の爪を受け止めていた。

「ありがとう。助かったよ」

「礼はいいから早く……！」

異形が左手の爪を漣奈に振り下ろす。

漣奈は後ろに跳んで槍の先でその爪を弾くと、続けざまに異形の胸目がけて突きを放つ。

それを避け、異形は羽ばたき距離を取った。

漣奈が追撃を試みるが、異形は空中で向きを変え、由美の方を向いた。

「ひっ……………」

由美は恐怖からかその場に座り込んでしまう。

漣奈が異形を追うが、由美に襲い掛かる異形の方が速い。

「うらあああああ！」

龍哉は右肩の焼け付くような痛みにも耐えながらも、近くにあった銅像の剣を引っ掴むと全力で異形に向かって投げた。

投げられた銅剣は回転しながら異形へ一直線に飛び、その背中を勢いよく貫く。

異形は一瞬動きを止めたかと思うと、剣が刺さった場所から空間

に溶け込むように消えていき、剣が床に落ちて鈍い音を響かせた。

「あれ？ 終わった？ って、肩から血が出てるぞ!？」

「……何してたんだよ信吾」

台座のところに来た信吾に対する龍哉の声には、ドスがきいていた。

「い、いや、他にも何か無いかなくて調べてたらいつの間にか高橋の姿が無くて、龍哉の雄叫びを聞いてこっちに急いで来たんだけど

……ごめん」

「まあみんな助かったからいいじゃないの。風谷君。由美を連れてきてくれる？」

「……分かった」

龍哉はまだ文句が言い足りないようだったが、しゅしゅ漣奈の意見に従った。

「大丈夫か？ 桐原」

「……うん。ありがとう」

龍哉は由美に手を差し伸べた。少し照れ臭い様な気もするが、今はそんなことを言ってられる状況ではない。

由美がその手を握り立ち上がった時、龍哉が手に持っていた赤い石が眩いばかりの光を放った。

「見て！ 床が！」

足元を見ると床には無数の文字のようなものが浮かび、一つの円

を作りに上げていた。

「どうしたの!？」

「龍哉！ 今度は何だ？ 魔法陣か!？」

信吾と漣奈も駆けつけてきたようだ。

信吾の表現を使用するなら、魔法陣から生み出された光の球が神殿の内部に満ちていく。

四人はその幻想的な光景を逃げることも忘れて眺めていた。光の球はやがて中央に集まり一つの太陽のようになった。

あまりの光量に目を瞑^{つむ}ってしまう。

その時だった。不意に床が消えたのは。

下に体が引つ張られる。重力に従って体が落ちていく。

龍哉は繋がれたままの由美の温かい手を感じながら、奈落の底へと落ちるような感覚を味わった。

意識が薄れ、そのまま龍哉の意識は闇に包まれた。

【1・2】 encounter

「……………ヒマだ」

日の高さがそろそろ一番高い位置に到達しようというところ、トナ・ヴァークス王国のとある王宮魔導師執務室の椅子に一人の青年が座っていた。

撫で付けても意味の無さそうなボサボサした赤髪に野性的な顔立ちという、豪華な部屋にはとても似合わぬ風体をしている。

しかし、この青年はこの部屋の主でもあった。

「少し前までは息つく時間さえ無かったのに……………まあ、平和が一番か」

「それじゃあ、仕事をあげよーか？」

「うおおっ！　いてっ！　シ、シーファいつからそこにいた!？」

驚きのあまり椅子から落ちた青年の後ろには、長い水色の髪を二つに纏めた少女が立っていた。

「フォルが『ヒマだ』って言ったあたりにつつそり入ってきたの」

「気配を消すのがうますぎるだろ……………いや、この場合は気づかない俺が悪いのか？」

「致命的だね。もし私が暗殺者だったらフォルは今頃死んでるよ？」

「……………その呼び名も止めるって言ってんだけどな。で、シーファ。結局何の用だ？」

何故か王国の密偵並みに隠密技術のある自らの補佐官に、王宮魔導師であり火属性の最高権威、『火の賢者』と呼ばれるフォルは尋ねた。

「王妃様からの指令を伝えに来たよ」

「！……………何かあったのか？」

（皇国が何かしらの行動を起こしたか、それとも王宮内に裏切り者が出たか…………？）

王妃が命令を下すのはよほど重大な問題が発生した時のみである。フォルはシーファに問いかけながらも頭の中で高速で考えを巡らせていた。

「えーと、王妃様から預かった命令書を読むよ。」

『面倒ですので何時もの口調で書くことにいたします。王国の宝物庫に保管されている魔法遺物に昨日反応があったので調べてみると、世界規模の転移魔法がこの国で使用されたことが分かりました。貴方にはその転移魔法の使用者、及び魔法陣を発見してもらいます。相当な術者である可能性があるので、搜索の際にはくれぐれも油断をしないように。この任務は極秘任務なので他の者には漏らさぬようにお願いします』

「だとさ。王妃様も相変わらずだね」

「………………。それで、場所はどこだ？」

フォルは自らの就任当初から変わらぬ王妃の態度に頭を抱えたい気分になったが、気を取り直してシーファに尋ねた。

「んーと、ここは…………ガルバドス近郊の森だね。片道に三日くらいはかかりそうだよ」

「よし、行くぞシーファ」

「へ？ いや、ちょっとフォル？」

「久しぶりに暴れてみたくなった。片っ端から森にいる魔獣を焼肉にしていくぞ」

「で、私はフォルの料理で起きた火災の消火をしなきゃならないの？ あ、そうだ。いいこと思いついた。元凶を先に消火しておけばいいんだ」

どこか不自然な笑顔を浮かべるシーファの右手には、人の頭ほどの水塊が浮かべられていた。

「……………すみません。自重します」

「じゃ、行こつか。ね？ 賢者さま」
「……………」

王宮魔導師補佐官に続く形で フォル 火の賢者は執務室を後にした。

「伝説の魔獣が出たって話だったから来てみれば、ただの人喰い鳥 ヘルグナ の群れか」

「少し期待してたんだけど。一応、信頼できる筋からの情報だったし」

「報酬が高いのがせめてもの救いだ。これで銀貨一枚だったりした日には、俺は絶対に集会所を潰すよ」

「お願いだから本気でしないでね」

軽い口調で会話する男女の足元には、無数の鳥の死骸が散らばっている。

木々の間から僅かに漏れる日の光が死骸から流れ出る血に反射して光を放っていた。

「しかし最近は魔獣が多いな。討伐にあたる傭兵は少ないってのに」

「皇国と一触即発の状態になってるから騎士団が動けないのよ。でも」

「多すぎだろ？」

「……ええ」

以前は魔獣討伐の仕事など十日間に一件くらいだった。それが最近になって毎日のように依頼が出されている。

「この町は傭兵が二人もいるからいいけど、聞いた話によると傭兵がいない所為で危険な町もあるらしいわ」

「自衛団を作っても素人では魔獣には対抗できない。それこそ竜種になんか勝てるはずも無い」

「考えてもしょうがないわ。自分に出来るだけのことをすればいいのよ」

「そうだな。疲れたし、今日は引き上げるぞ」

「数秒で葬ったくせに何を言ってるのかしら。そもそも」

「きゃあああああああ！」

森の中に響く絹を裂くような悲鳴。それを聞いた瞬間、二人は悲鳴のした方へ走り出していた。

「……………っっ」

龍哉は顔を顰^{しか}めながらも、ゆっくりと体を地面から起こした。

「っ！……………夢じゃない、か」

ふと肩に手を伸ばすと、鋭い痛みが走る。負傷した肩からはまだ血が出ていた。

そのとき龍哉は違和感を感じた。握った右手が何かの感覚を伝えているのだ。

（これは……………砂時計？）

開いた手の中にあつたのは、銀色の砂が封じられた小さな砂時計だった。

龍哉は砂時計を見ることが自体が久しく、一つも所持していない。

（一応持つとくか……………僕は元の場所に帰ってこれたのか？ 信吾たちは何処にいるんだ？）

砂時計をジーンズのポケットに入れた龍哉は、周りを見渡し近くの木の下に倒れている影を見つけた。すぐさま駆け寄り、声を掛ける。

「桐原、起きろ！」

「……………ん」

龍哉の声に、僅かに身じろぎした後、由美は目を開けた。

「……風谷？ 何で私こんなところに寝てるの？」

「神殿での事は覚えてる？ 僕達は、また変な場所に來たらしいよ」

由美は起き上がると、立ち上がってズボンに付いた土を払った。
その際に由美の右手から小さな光るものが、地面に落ちて転がる。

「何これ？」

（！ それは……）

由美が拾い上げた物は龍哉の予想通りのものだったが、一つだけ
違う点があった。

砂時計の中に封じられている砂の色が由美の砂時計は漆黒なのだ。

「僕も同じものを持ってる。知らないうちに手に入れたみたい」

自分の砂時計を見せながら龍哉は言った。

「ふーん。いちおう貰っておこーと。ところで湊奈と林崎は？」

「それが」

「クエエエ！」

龍哉が答えようとした時、不意に頭上から鳥の声が響いた。

見上げると、木の枝に三羽の巨大な鳥が止まっていた。鮮やかな
青色をしたその鳥は、龍哉と由美を狙っているように見えた。

「これってヤバイんじゃない……」

嫌な予想ほどよく的中するもので、そのうちの一羽が由美に向か

つて一直線にダイブしてきた。

「きゃあああああああ！」

叫び声を上げた由美は駆け出そうとするが、石に躓き手をついてしまう。

それを嘲笑うかのように、鳥は嬉々として由美との距離を縮める。それを見た龍哉は、近くにあった石を鳥に向かって振りかぶった。放物線を描き飛んでいった石はうまい具合に鳥の頭に当たり、空中でよろめく。

その隙に龍哉は由美の腕を掴むと木の陰に引っ張り込んだ。

「クエツ！ クエエエエエエ！」

どうやら鳥を怒らせてしまったようだ。龍哉は意外と冷静な自分に少し驚いたが、異形のせいで慣れたのだろうと考え、落ちている比較的大木の木の枝を構えた。

龍哉は剣道などしたことが無い。その為か、とりあえず『構えているにすぎないのだが、警戒したのか鳥は龍哉を高めの枝から見下ろしている。』

「今のうちに逃げられないかな？」

「戦えないの？」

「無茶言つなよ、僕は高橋みたいに強くないんだから」

あくまで『たたかう』のコマンドを選ぼうとする由美に、『にげる』を選びたい龍哉は言った。

「クエツ！」

膠着状態に業を煮やした鳥が、龍哉に向かって飛び込んでくる。龍哉が迎え撃とうと棒を握る手に力を込めたその時、不意に背後に気配を感じて振り返った。

眼前に迫る鋭い爪。持ち前の反射神経をフルに使って龍哉は棒でそれを弾いた。

「……ははっはは。忘れてた。そっぴや、三羽もいたんだっけ」

一羽はけん制だったようで、元の枝に戻っていた。どうしようかと龍哉が思索していたその時、目の前に飛び出してきた影があった。刹那、虚空に炎の剣が現れ一羽の鳥を切り裂く。

反応することも出来ずに絶命した鳥は、煙をあげながら地面にドサツという音を立てて落下した。

「クエツ！ クエクエツ！」

仲間の死に激昂した残りの二羽が現れた人物に襲い掛かるが、一陣の風が吹いたかと思うと次の瞬間には二羽とも地面に叩きつけられていた。

「へ？」

呆然とする龍哉の目の前に、いつの間にか青髪の青年と茶髪の女性を立てていた。

龍哉の目の前にいる二人は異様な風体をしていた。二人とも動物の革を固めたような服を着込んでいる。これは革鎧と呼ばれる防具なのだが、この時の龍哉は知る由も無かった。

青髪の男はまるで鋭い剣のような雰囲気纏っており、左目は完全に前髪によって隠されてしまっている。腰に血で赤く染まった鈍く銀色に光る一対の剣を下げていることが異様さをより一層引き立てていた。

先程の炎の剣を生み出した張本人だろう。

背中まで流れる長いストレートヘアを持つ茶髪の女性は、何も持たずに龍哉と由美に近づいてきた。

どう考えても銃刀法違反な男と、なにやらファンタジックな力を使った女に警戒し、龍哉はいつでも逃げることの出来る体勢を作る。

「大丈夫？ ケガとかしてない？」

茶髪の女が心配そうに由美に問いかけた。

「あ、えつと、助けられてありがとうございます」

「気にしないで。それにしても、処理し損ねた小さな魔獣の群れがあつたみたいね」

意表を突かれたような、その由美の返答に茶髪の女は緑色の瞳を細めて微笑んだ。その様子に龍哉も緊張を解く。龍哉は二人が悪人だとはとても思えなかった。

「待て。ローザ、素性を確かめておいた方がいい」

青髪の男がローザと呼ばれた女に警戒したような口調で言った。長い前髪に隠されていない方の蒼い右目が、龍哉と由美を冷たく見据えていた。

「必要ないと思うわ。この子達からはそんな気配はしないのよ」
「……そうか。お前が言うならそうなのだろう」

ローザとは恐らく茶髪の女性の名前のことだろう。
その言葉に、青髪の男は納得したように頷いた。

「けど、君達はこんな所までどうやって来たの？」

「それが……ここが何処だか分からなくて困ってて……」

「もしかして遭難しちゃった？」

「そーなんです。じゃなかった、正直迷ってる状態です」

「……風谷。寒い」

「……………」

親父ギャグが思わず口から出てしまった龍哉に、容赦なく由美の言葉が突き刺さった。

「ということは、何かしら？ 君達は迷子って訳ね？」

「そうなるのかなあ……」

正確に言えば変な力でこの場所に飛ばされたことになるのだが、
信じてもらえるかどうかが疑わしい。最悪の場合、精神異常者認定
だ。

「なら早く町に戻りましょう。こんな魔獣だらけの場所、さっさと
出た方がいいわ」

「あの……さつきから魔獣、魔獣って何の事ですか？」

「何言ってるの？ 魔獣は魔獣。特異な力を持った獣の総称よ」

さも当然とばかりに言い切ったローザに、龍哉は何とか思考を追

いつかせようとして　断念した。

「ローザさん？　さっき出した炎の剣って一体……」

由美がローザに龍哉も聞きたかった事をおずおずと尋ねた。

「あら、もしかしてテウルギアを見るのは初めてだったの？　珍しい環境で育ったのね」

「……ローザ。まさかとは思うが「貴族の子だと思ってるのなら、それも違っわ。確かにこの子達の服装や肌は綺麗だけど、貴族然とした態度や言動が全く無いのよ」……」

何かを言いかけた青髪の男に、ローザが被せるように言い放った。

「なら、一つ聞かせてくれ。お前たちが持っている、その魔法具まほうぐは何だ？　テウルギアを知らないと言っのなら、何故魔法具を持っている？」

「ウィアドはやっぱり気づいてたのね。　　　　　原則として魔法具の所持は禁止されているのは知ってるでしょう？　その大きな力故に、よからぬ事を考える輩も少なからずいるのが現状だから」

青髪の男　　ウィアドを見ながらそう言ったローザは、龍哉の方に向き直った。

「持っている魔法具を見せてもらえるかしら？」
「……………」

龍哉は当然『魔法具』なんて訳の分からない単語は知らない。何の事か分からず、途方に暮れた龍哉は由美に視線を向ける。

……　由美は知らないとはかりに目を逸らした。

「そんな言い方したら警戒されるわよ。別に悪い物じゃないみたいだし、二人とも同じ物を持っているみたいだから、誰かから貰った物なんでしょ？」

最後の方の言葉は龍哉と由美に向けられたものようだ。

「ねえ風谷。もしかして、あの変な砂時計の事じゃないの？」
「！ それだ！」

龍哉はズボンのポケットから、先程手に入ってしまった砂時計を取り出した。

ローザはそれを受け取ると、しげしげと見つめた後、やがて口を開いた。

「%＊／＃？
μ」
「……………え？」

龍哉の耳に入ってきたのは全く聞き覚えの無い言語だった。

「……………？」

訝しげに言ったウィアドの言葉も、龍哉には全く意味が分からなかった。

「えーと、何を言ってるんですか？」
「風谷？ どうしたの？」
「……………¥」
「！……………！」

ウィアドの言葉で何かに気づいたように言ったローザが、砂時計を龍哉の手に戻した。

「言葉は分かる？」

「あ……分かるようになった。何でだろ？」

「たぶん、君達とこっちの使っている言葉は違うわ。この魔法具の力で通じるようになってるんじゃないかしら」

全自動翻訳機みたいな物なのだろうか、と龍哉は考えた。

「効果を知らないということは、お前達はこの魔法具の所有者では無い訳だ。話している言語も違うのなら、いったい何処の国の生まれだ？」

「国って……日本ですけど？」

「ニッポン？ そんな国聞いたこと無いわよ？」

「……辺境国か？ 黒髪の間人は北の方でしか見たことは無いんだが……」

「そこまで、寒い国じゃない気がするけど……ローザさん達の生まれは何処ですか？」

「私はトナ・ヴァークス王国よ。って、この国だけだね」

「どこだ……」

聞き覚えの欠片も無い国名だ。龍哉は別に全ての国名を記憶している訳では無いが、少なくとも日本から外に出た覚えは無い。

「何だかややこしくなってきたような気がするな……」

「風谷、私、頭痛くなってきた……」

龍哉もいい感じに混乱してきた頃、ウィアドが口を開いた。

「少し、状況を整理してみようか」

龍哉と由美はここに至るまでの経緯をローザとウィアドに話した。

「ふーん。その変な魔法陣でここに飛ばされちゃったってワケね」

「転移魔法の一種だろうな。それもかなり大きなシロモノだ」

「詳しい事は分からないけど、君達は次元を超えた他の世界に来たのかも知れないわ」

「異世界……何て言うか、ファンタジーだな」

読んで字の如く、異なる世界。ゲームや漫画でしかお目にかかるような事は無いであろうイベントである。

普通なら到底信じることの出来るような話では無いが、今までの異常な出来事の所為か、龍哉と由美はすんなりと受け入れる事が出来た。

「この世界には魔法があるんですか？」

「説明すると長くなるから割愛するけど、三種類あるわ。一つはテウルギア。思い浮かべた現象を現実反映する魔法よ」

ローザが手をかざすと同時に、指の先に小さな火が灯った。

タネも仕掛けも無い魔法に、由美は「おー」と歓声を上げ、龍哉は目を見開いた。

「二つ目はゴエティアで、精霊に力を貸してもらった魔法。はつきりと目に見えるような派手な効果は無いけど、結構便利なのよ」

「これは生まれつき素質があるかないかで決まるからな。俺は使えないんだ」

やや残念そうな口ぶりでウィアドが言った。

「三つ目はマゲイア。魔法陣を編み上げて水晶に封じ込めた道具を使うのよ。複雑すぎて面倒だから使わないのよね」

「へえ」

龍哉の隣で由美は目をキラキラさせて話を聞いていた。憧れていた面があつたのだろう。

「そういえば、元の世界に戻るには、どうすればいいのですか？」

一番確認しておかなければならない事を龍哉はローザに聞いた。これから人生に一度しか無いであろう異世界観光を楽しむにしろ、帰る方法が必要だ。

龍哉は魔法があるのなら、当然のように存在すると思っていた。

「方法なんて無いわ。元の世界に戻るのは不可能よ」

しかし、ローザの答えは龍哉達の期待を粉々に打ち砕くものだった。

「……そんな！ こっちの世界に来れたのなら、元の世界にも帰れるんじゃないの!？」

由美が金切り声を上げた。恐れと不安感が、龍哉にも伝わってきた。

「俺はアイツほど魔法に詳しくは無いが、転移魔法によって世界を渡る際には、無限ともいえる世界の中から、無作為に一つの世界が選ばれ、使用者を転移させる。つまり、同じ世界に帰れる可能性は皆無だ」

「……………嘘だろ……………」

「嘘じゃない。真実だ」

「じゃあ私達はもう帰れないって!？」

「そういうことになるわね。こればかりは、どうしようも無いのよ」

嘘だと信じたかった。目の前の二人は嘘を吐いているのだと。

でも、まるでその言葉に偽りが無い事を証明するかのように。

龍哉を見るローザとウィアドの目には、真っ直ぐな光だけが宿っていた。

帰るのに必要なのは、どんなに難しい条件でも、血の滲むような努力でも無かった。

出来ない。ただ、それだけだったのだ。

押し寄せる不安感。

龍哉は隣で由美が今にも泣き出しそうな表情をしているのを見て、挫けそうになる心を落ち着けた。

「これから、僕らはどうすれば？」

元の世界に戻る手段が無いと分かった以上、この世界で生きていくしか道はないのだ。

しかし、どうすればいいのか見当もつかない。

「大丈夫よ。魔獣だらけの森の中に置いてったりはしないわ」

「ああ。せめて、お前らがこの世界で生きていけるようになるまで、面倒を見てやるさ」

そんな心境を察してくれたのか、ローザとウィアドが口々に言った。

「……ありがとうございます!」「」

「それと、敬語もやめてくれ。どうにも、慣れないものでな。ウィアド、と呼んでくれ」

「それがいいわ。ローザでいいわよ。あ、それと、貴方たちの名前は？」

「風谷……じゃなくて龍哉でいいよ」

「切り替えはやっ……えーと、桐原由美です」

ローザの言葉に二人は自己紹介をした。龍哉の適応力が高いのは、その性格ゆえの恩恵かもしれない。

「リユーヤとユミね。よろしくね？」

「そうだ、どうせならお前らも傭兵になったらどうだ？」

「よろしく願います……って、傭兵？」

聞き覚えの無い単語に、龍哉は思わず聞き返す。

「それいいわね。ユミは無理だと思うから、リユーヤ、傭兵になっ
てみない？ 楽しいわよ」

「いや、だから傭兵って何？」

「俺達のことだよ。町や国からの依頼を受けて、主に魔獣の討伐を
行う仕事だ」

「今日は人喰い鳥ベルグナの討伐が目的で森に来たの。で、帰ろうとしたら
リユーヤ達が襲われてたのよ」

「ローザとウィアドが来てくれなかったら、僕達、食われてたのか
な」

その可能性を想像した龍哉は身を震わせた。

「危険度は低いが、執拗に群れて人を狙う習性は厄介だからな。犠
牲者は毎年出ている」

「けっこう怖いな、それ」

「ま、傭兵にとっては、小鳥みたいなものだけだな」

可笑しそうに口元を緩めるウィアド。その雰囲気からは既に刃物のような鋭さは無くなっていた。

「あ、そうだ。魔法があるなら、回復魔法は無いのか？ ケガとかを一瞬で治せるようなのか」

「あら、貴方が住んでいた世界にはそんな素晴らしいものがあつたの？」

「魔法自体が無いから。黒魔術みたいなのはあつたかも知れないけど……」

「よく暮らせたわね。それはともかく、傷を治すなんて事は不可能よ。出来るとしてもせいぜい消毒くらいかしら。町に戻って治療してもらうのが一番ね」

「町があるの！？」

町と聞いて、由美が声を上げる。

「ああ。戻るとしうか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1911n/>

前世界の証明者

2010年10月10日13時10分発行